

# 高校生の全体的自己価値の検討

## A Study on Global Self-Worth of High School Students

山本 ちか  
Chika YAMAMOTO

本研究の目的は、高校生の全体的自己価値の様相を検討することである。全体的自己価値については、男子の得点が高く、女子の方が自分自身を否定的に評価している。また学年差はほとんどみられず自分自身の評価の仕方に学年による違いはあまりないようである。具体的側面の自己評価も同様で女子の方が否定的に評価している。また全体的自己価値と具体的側面の自己評価、具体的側面の重要度の関連の仕方については、男女ともいずれの学年も「身体的外見の自己評価」が全体的自己価値に影響している。「身体的外見」以外の側面については、全体的自己価値と具体的側面の自己評価や重要度の関連の仕方は、性別・学年別に相違がみられるようである。

The purpose of this study was to examine the relationship between the global self-worth, the domain-specific self-evaluation, and the domain-specific importance for high school students. The self-evaluations and importance were assessed physical appearance, athletic competence, academic competence, relationship with parents, and relationship with friends. The results showed the global self-worth and domain-specific self-evaluations were negative, for female. The physical appearance self-evaluation was strongly related to the global self-worth. It was suggested that the influence on global self-worth of the domain-specific importance is different from domain-specific self-evaluations, by gender and grade.

キーワード：全体的自己価値，具体的側面の自己評価，具体的側面の重要度，高校生  
global self-worth, domain-specific self-evaluation, domain-specific importance,  
high school students

### 【目的】

全体的自己価値とは、自分自身についての評価的感情であり、例えば自分のことが好きであるのか、自分に満足しているのかといった自分自身全体について肯定的に評価しているのかの程度を示すものである。

従来青年期は「疾風怒濤」の時期であると表現されるように、緊張と葛藤に満ち、ストレスの多い時期であると考えられてきた。自分自身全体に対する評価である自尊心や全体的自己価値についても例外ではなく、青年期は自己像が激動する時期であり、自尊心

や全体的自己価値が著しく低下するなど、不安定で動揺する時期であると言われてきた。しかし近年の研究をみても、初期青年期には自尊心・全体的自己価値の動揺が起こるが、それ以降は安定しており、青年中期、後期には若干高まると考えられている<sup>1)2)3)</sup>。

Yamamoto, Ujiie, Ninomiya, Igarashi, & Inoue(2006)<sup>4)</sup>は、初期青年期にあたる中学生の全体的自己価値の縦断的变化について検討しており、全体的自己価値は、男子よりも女子の方が否定的に評価し、1年生より3年生の方が否定的に評価する傾向がみられている。

本研究では、青年期中期にあたる高校生が、中学生と同様に自分自身について否定的に評価しているのか、それとも比較的肯定的に評価しているのかを検討する。

またこうした自分自身を否定的に評価する傾向にどのような要因が影響しているのだろうか。Harter(1988)<sup>5)</sup>は、中学生・高校生を対象として、「学力コンピテンス Scholastic Competence」「社会的受容 Social Acceptance」「運動能力 Athletic Competence」「身体的外見 Physical Appearance」「仕事コンピテンス Job Competence」「恋愛関係 Romantic Relationships」「道徳的行為 Moral Conduct」「親友 Close Friendships」の8つの具体的側面の自己評価を捉えている。そして青年にとって、全体的自己価値に最も影響している側面は、「身体的外見についての自己評価」であり、逆に全体的自己価値にあまり影響しないのは、「学力」、「運動能力」についての自己評価であると述べている<sup>6)</sup>。DuBois, Felner, Brand, Phillips, & Lease (1996)<sup>7)</sup>は、5つの具体的な領域(仲間関係, 学校, 家族, 身体的外見, スポーツ)の自己評価が、全体的自尊感情へ影響し、最も影響するのは、身体的外見であることを指摘している。

本研究についても、自分自身全体についての評価である全体的自己価値とは別に、身体的外見や知的能力など自分自身のより具体的な側面についての評価についてもとりあげ、高校生にとって全体的自己価値にはどのような側面の自己評価が関連しているかを検討する。具体的な側面としては、高校生にとって重要であると思われる「外見」の自己評価、「スポーツ能力」の自己評価、「知的能力」の自己評価と、対人関係領域として「家族関係」の自己評価、「友だち関係」の自己評価をとりあげる。

一方で、具体的側面の自己評価だけではなく、具体的側面について自分がどれだけ重要だと思っているか(例えば、外見をどれだけ重要だと思っているか)についても、自分自身全体に対する自己評価である全体的自己価値に関連するのではないだろうか。自分が重要であると感じている側面で、自己評価が高ければ全体的自己価値が高くなるが、自己評価が低ければ全体的自己価値は低くなる。しかし逆にあまり重要でないと感じている側面では、その側面の自己評価が低くても全体的自己価値には影響しないという可能性も考えられる。

山本・氏家・二宮・五十嵐・井上(2007)<sup>8)</sup>では、

中学生の全体的自己価値と具体的側面の自己評価、具体的側面の重要度の関連を検討している。その結果、男女とも外見を重要だと感じていることが、外見の否定的な自己評価、全体的自己価値に影響し、否定的な自己評価が否定的な全体的自己価値に影響している。スポーツ能力は、女子は重要だと感じていることは全体的自己価値に関連していないが、男子は重要であると感じていることが否定的な全体的自己価値と関連している。知的能力については、女子は知的能力を重要視していることが肯定的な自己評価に影響し、肯定的な全体的自己価値に影響している。一方男子については、重要であると感じていることは、自己評価にも全体的自己価値にも関連しておらず、自己評価が全体的自己価値に影響している。

本研究では、高校生については、具体的側面についての自己評価が全体的自己価値に影響しているのか、それとも具体的側面を重要だと思っていることがより全体的自己価値に影響を与えているのか、重要度が自己評価に影響し全体的自己価値に影響するという間接効果がみられるのか、中学生と同様に側面によって自己評価と重要度の関連の仕方が異なるのかを検討する。

本研究の目的をまとめると以下のとおりである。

1. 全体的自己価値および具体的側面の自己評価について、性別・学年別に相違がみられるかどうかを検討する。
2. 全体的自己価値に影響を与えているのは、具体的側面の自己評価のどの側面であるのかを検討する。
3. 全体的自己価値により強く影響するのは、具体的側面の自己評価であるのか、それとも具体的側面の重要度であるのか、また重要度が自己評価に影響し全体的自己価値に影響するという間接効果がみられるのかを共分散構造分析を用いて検討する。

## 【方法】

### 1. 調査内容

#### a. 全体的自己価値：

自分に満足しているか、自分が好きであるかなど自分自身全体をどのように評価しているのかを6段階評定(非常にあてはまる～非常にあてはまらない)でたずねた。Harter(1988)<sup>5)</sup>の「Manual for the Self-perception Profile for Adolescence」の全体的自己価値についての項目、DuBois(1996)の Self-Esteem Questionnaire、Rosenbergの自尊感情尺度<sup>9)</sup>(日本語

訳は山本・松井・山成,1982を参考<sup>10)</sup>にした)を参考に5項目を作成した。これら5項目について高得点ほど肯定的に評価しているように合計得点を算出した。

b. 具体的な側面の自己評価：

身体的外見、スポーツ能力、知的能力、家族との関係、友だちとの関係について、どのように評価しているのかをたずねた(21項目)。項目は、全体的自己価値と同様に、Harter(1988)の「Manual for the Self-perception Profile for Adolescence」の項目、DuBois(1996)<sup>7)</sup>のSelf-Esteem Questionnaireの項目を参考に作成し、6段階評定(非常にあてはまる～非常にあてはまらない)でたずねた。

「外見」は、今の自分の見た目に満足している、自分の顔が気に入っているなど外見についての評価である。「スポーツ能力」は、自分のスポーツ能力に満足しているなど自分のスポーツ能力をどのように評価しているかをたずねた。「知的能力」は、自分の勉強能力に満足しているなど頭のよさや勉強の能力をどのように評価しているかである。「家族との関係」の自己評価は、家族との関係に満足している、家族と仲良くできていないと思うなど、家族との関係をどのように評価しているかである。「友だちとの関係」は、友だちとの関係に満足している、友だちとうまくやっていく自信があるなど友だちとの関係をどのように評価しているかである。それぞれの側面について、高得点ほど肯定的に評価しているように合計得点を算出した。

c. 具体的な側面の重要度：

「外見がどうであるか」、「スポーツができるかどうか」、「頭がよいかどうか」、「学校の成績がよいかどうか」、「家族との関係がよいかどうか」、「友だちとの関係がよいかどうか」が自分にとってどれくらい重要であるのかを6段階評定(非常にあてはまる～非常にあてはまらない)でたずねた。

2. 調査実施時期と実施方法および調査協力者

調査は、私立高校の1、2年生に依頼した。四年制大学への進学者が多数を占め、スポーツなどの課外活動にも力を入れている普通科の高校である。調査の依頼は学校を通して行い、2005年3月に担任教師よりホームルーム時間中に配付し実施してもらった。調査用紙の配付数880名(1年男子234名、1年女子231名、2年男子208名、2年女子207名)であった。なお、調査は強制ではないこと、記入したくなければ記入しなくてもよいことを調査用紙に明記した。

分析は、すべての項目に回答のあった627名(1年男子185名、1年女子202名、2年男子106名、2年女子134名)について行った。

【結果および考察】

1. 全体的自己価値および具体的な側面の自己評価についての平均値、標準偏差および分散分析の結果

a. 全体的自己価値 全体的自己価値の各項目について性/学年別に、平均値(SD)を算出し、性別(2)×学年(2)の分散分析を行った(Table1)。その結果、「今の自分が好きである」では、男子の得点が高く( $F=6.19, p<.05$ )、「時々自分のことがいやになる( $F=13.51, p<.001$ )」と「私はもっと自分に自信がもてたらいいなと思う( $F=5.97, p<.05$ )」といった項目は男子より女子の得点が高かった。また「時々自分がだめな人間だと思う」では1年生より2年生の得点が高かった( $F=4.17, p<.05$ )。いずれの項目も交互作用はみられなかった。

b. 全体的自己価値の合計点と具体的な側面の自己評価

全体的自己価値と具体的な側面の自己評価について、得点が高いほど肯定的に評価しているよう合計点を算出した。そして性/学年別に、平均値(SD)を算出し、性別(2)×学年(2)の分散分析を行なった(Table2)。

その結果、「全体的自己価値」については、性差がみられたが( $F=11.29, p<.01$ )、学年差および交互作用

Table 1 全体的自己評価の項目ごとの平均値(SD)と分散分析の結果

	1年男子		1年女子		2年男子		2年女子		主効果	
	M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)	性差	学年差
今の自分自身に満足している	3.09	(1.10)	3.09	(1.07)	3.07	(1.17)	2.97	(1.12)	n.s.	n.s.
今の自分が好きである	3.11	(1.15)	2.89	(1.19)	3.13	(1.25)	2.87	(1.14)	男>女*	n.s.
時々自分がだめな人間だと思う	4.13	(1.44)	4.29	(1.33)	4.30	(1.32)	4.57	(1.22)	n.s.	1<2*
時々自分のことがいやになる	4.05	(1.39)	4.40	(1.19)	4.08	(1.37)	4.52	(1.25)	男<女***	n.s.
私はもっと自分に自信がもてたらいいなと思う	4.49	(1.11)	4.71	(1.08)	4.52	(1.08)	4.75	(1.17)	男<女*	n.s.

\*\*\*:p<.001, \*:p<.05

Table 2 全体的自己評価と具体的側面の自己評価の平均値 (SD) とおよび分散分析の結果

	1年男子		1年女子		2年男子		2年女子		主効果	
	M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)	性差	学年差
全体的自己評価	2.90	(0.77)	2.72	(0.76)	2.86	(0.86)	2.60	(0.87)	男>女**	n.s.
外見の自己評価	2.94	(0.80)	2.34	(0.74)	2.99	(0.90)	2.38	(0.83)	男>女***	n.s.
スポーツ能力の自己評価	2.99	(1.00)	2.86	(1.10)	3.40	(1.09)	2.84	(1.24)	男>女***	1<2*
知的能力の自己評価	2.48	(0.76)	2.39	(0.68)	2.66	(0.87)	2.40	(0.80)	男>女**	n.s.
家族との関係の自己評価	4.11	(0.96)	4.18	(1.03)	4.20	(0.96)	4.40	(1.00)	n.s.	n.s.
友だちとの関係の自己評価	3.91	(0.87)	4.10	(0.88)	4.12	(0.75)	4.16	(1.03)	n.s.	n.s.

\*\*\*:p<.001, \*\*:p<.01, \*:p<.05

用はみられなかった。「外見」も全体的自己評価と同様に、性差がみられ ( $F=82.17, p<.001$ ), 学年差や交互作用はみられなかった。「スポーツ能力」は傾向が異なり、性差がみられ ( $F=14.06, p<.001$ ), 学年差もみられた ( $F=4.70, p<.05$ ). また交互作用もみられ ( $F=5.70, p<.05$ ), 男子は1年生と2年生で差がみられた。「知的能力」については、全体的自己評価や外見と同様の傾向があり、性差がみられ ( $F=7.96, p<.01$ ), 学年差はみられなかった。また「家族との関係」と「友だちとの関係」については、性差も学年差もみられなかった。

## 2. 全体的自己評価と具体的側面の自己評価の関連

全体的自己評価と具体的側面の自己評価の合計得点を算出した。

全体的自己評価に影響を与えているのはどの側面の自己評価なのかを検討するため、全体的自己評価を従属変数とし、外見、スポーツ能力、知的能力、家族との関係、友だちとの関係の自己評価を説明変数とする重回帰分析をAmosを用いて性別・学年別に行った。まず5つの説明変数間のすべてに共分散を仮定したモデルを検討した。1年女子の結果をFig.1に示した。

1年男子：モデルの適合度は、 $\chi^2=3.70$ , AGFI=.92, CFI=.86であった。また $R^2$ は.11であった。外見(標準化係数=.26,  $p<.001$ )と友だちとの関係(標準化係数=.21,  $p<.01$ )、の自己評価が全体的自己評価に関連していた。

1年女子：モデルの適合度は、 $\chi^2=4.30$ , AGFI=.96, CFI=.99であった。また $R^2$ は.31であった。外見の自己評価は、最も全体的自己評価に関連しており(標準化係数=.29,  $p<.001$ )、知的能力(標準化係数=.27,  $p<.001$ )、友だちとの関係(標準化係数=.23,  $p<.001$ )、スポーツ能力(標準化係数=.13,  $p<.05$ )も関連していた (Fig.1)。

2年男子：モデルの適合度は、 $\chi^2=3.57$ , AGFI=.92, CFI=.97であった。また $R^2$ は.31であった。外見の自己評価は、最も全体的自己評価に関連しており(標準化係数=.40,  $p<.001$ )、スポーツ能力(標準化係数=.24,  $p<.01$ )、家族との関係の自己評価(標準化係数=.22,  $p<.01$ )も関連していた。

2年女子：モデルの適合度は、 $\chi^2=5.28$ , AGFI=.96, CFI=1.00であった。また $R^2$ は.48であった。外見の自己評価は、最も全体的自己評価に関連しており(標準化係数=.52,  $p<.001$ )、スポーツ能力(標準化係数=.21,

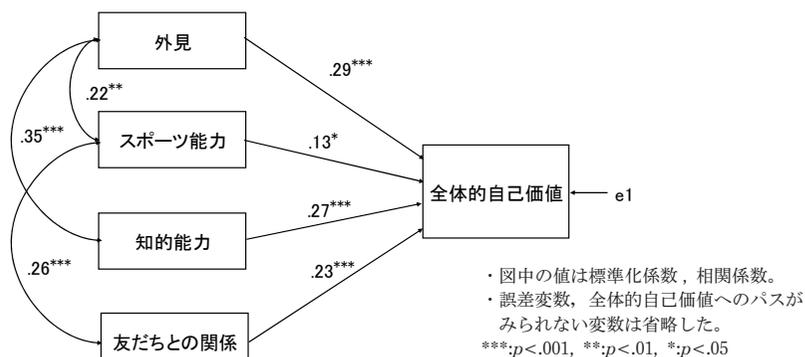


Fig.1 1年女子の最終的な推定結果

Table 3 具体的側面の重要度の平均値 (SD) と分散分析の結果

	1年男子		1年女子		2年男子		2年女子		主効果	
	M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)	性差	学年差
外見がどうであるか	4.10	(1.18)	4.31	(1.02)	4.08	(1.08)	4.24	(1.07)	男<女*	n.s.
スポーツがうまくできるかどうか	4.52	(1.21)	4.26	(1.12)	4.55	(1.13)	4.37	(1.20)	男>女*	n.s.
頭がよいかどうか	4.43	(1.24)	4.45	(1.09)	4.29	(1.27)	4.48	(1.07)	n.s.	n.s.
家族との関係がよいかどうか	4.45	(1.22)	4.58	(1.08)	4.49	(1.00)	4.76	(1.12)	男<女*	n.s.
友だちとの関係がよいかどうか	4.91	(1.08)	5.06	(0.89)	4.75	(1.11)	5.07	(0.94)	男<女**	n.s.

$p < .01$ ) と友だちとの関係 (標準化係数 = .15,  $p < .05$ ) も関連していた。

1年男子のみ他の群と比較して、 $R^2$ 値が低く適合度もやや低い。他の群と比較すると身体的外見の影響が低いことが関連しているだろう。また高校1年男子は今回扱った側面以外の側面での自己評価が影響している可能性が考えられ、どのような側面が影響しているのかを今後検討する必要がある。

### 3. 具体的側面の重要度の平均値, 標準偏差, および分散分析の結果

外見がどうであるか, スポーツができるかどうか, 頭がよいかどうか, 仕事が自分にとってどれくらい重要であるのかといった重要度について, 平均値, 標準偏差を算出した (Table 3)。男女ともどの側面についても平均値がかなり高く, 重要視している様子が見える。

男女で重要度に差がみられるかどうかを検討するため, 性別 (2) × 学年 (2) の分散分析を行った。その結果, 「外見」「家族」「友だち」については, 女子の方が重要であると考えているようである。「スポーツ」の重要度については, 男子の方が重要視している。またいずれの側面も学年差はみられなかった。

### 4. 全体的自己価値と具体的側面の自己評価, および具体的側面の重要度の関連

全体的自己価値により影響を与えているのは, 具体的側面の自己評価であるのか, 具体的側面の重要度であるのかを検討するため, 共分散構造分析を行った。外見, スポーツ能力, 知的能力, 家族との関係, 友だちとの関係の自己評価と, 外見, スポーツ能力, 知的能力, 家族, 友だちについての重要度から全体的自己価値へのパス, 各具体的側面の重要度から各側面の自己評価へのパスを仮定し, 自己評価の側面間, 重要度の側面間に共分散を仮定したモデルを検討した。

モデルの適合度は,  $\chi^2 = 202.48$ , AGFI = .83,

CFI = .90, RMSEA = .05であった。

1年男子: 「スポーツ能力」は自己評価ではなく, 重要度が全体的自己価値に否定的に影響していた。「知的能力」は自己評価も重要度も両方とも影響していなかった。「外見」と「家族との関係」と「友だちとの関係」は, 重要度が自己評価に影響し, 自己評価が全体的自己価値に影響していた。

1年女子: 「外見」と「友だちとの関係」は自己評価が全体的自己価値に影響しており, 重要度は影響していなかった。「知的能力」は重要度が自己評価に影響し, 自己評価が全体的自己価値に影響していた。

2年男子: 「知的能力」と「友だちとの関係」は, 自己評価も重要度もいずれも影響していなかった。「スポーツ能力」と「家族との関係」は, 重要度が自己評価に影響し, 自己評価が全体的自己価値に影響していた。

2年女子: 「外見」と「スポーツ」については, 重要度が自己評価に影響し, 自己評価が全体的自己価値に影響していた。「スポーツ」は重要視しているほど肯定的な評価を持っているのに対し, 「外見」は重要視しているほど否定的な評価を持っている。「家族との関係」については, 自己評価ではなく重要度が全体的自己価値に否定的に影響していた。「知的能力」は, 自己評価が影響していた。

### 5. まとめ

本研究の目的は, 全体的自己価値, 具体的側面の自己評価, 具体的側面の重要度から高校生の自己の様相を捉えることであった。

全体的自己価値については, 女子はかなり否定的に評価している。具体的側面の自己評価は, 外見, スポーツ能力, 知的能力の自己評価では女子の方が否定的に評価しているが, 家族関係や友だちとの関係については, 男女とも否定的に評価しておらず比較的満足しているようである。また学年差はほとんどみられず自身自身の評価の仕方に学年による違いはあまりないよう

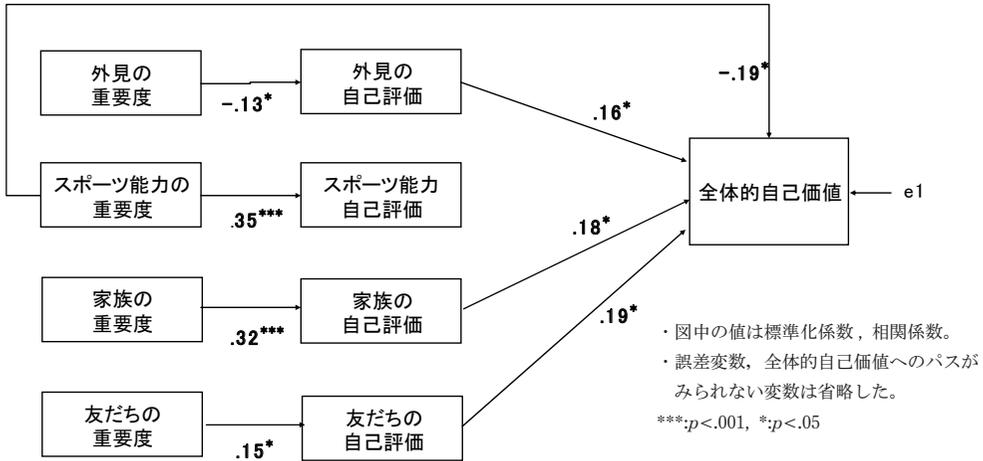


Fig.2 最終的なモデルの推定結果（1年男子）

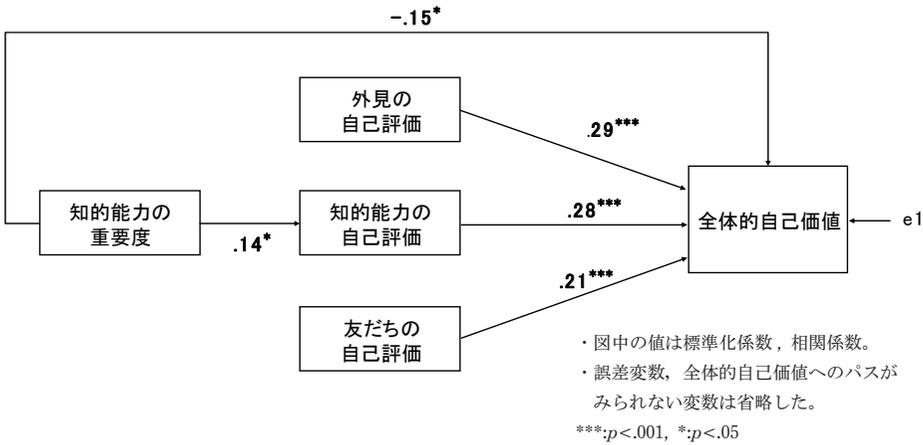


Fig.3 最終的なモデルの推定結果（1年女子）

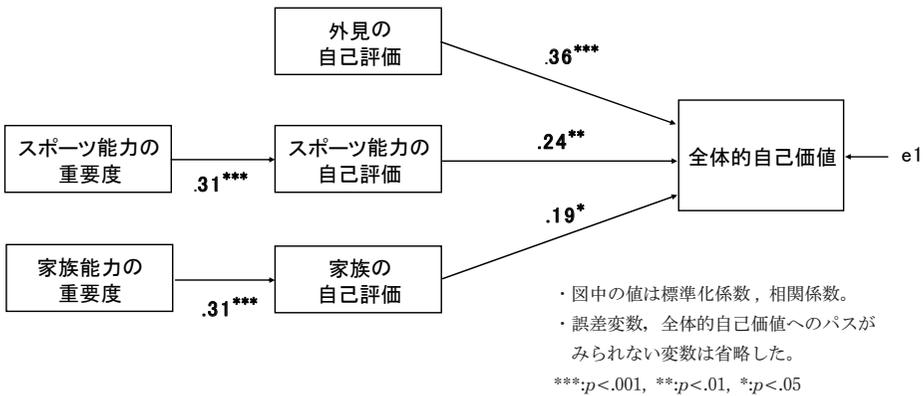


Fig.4 最終的なモデルの推定結果（2年男子）

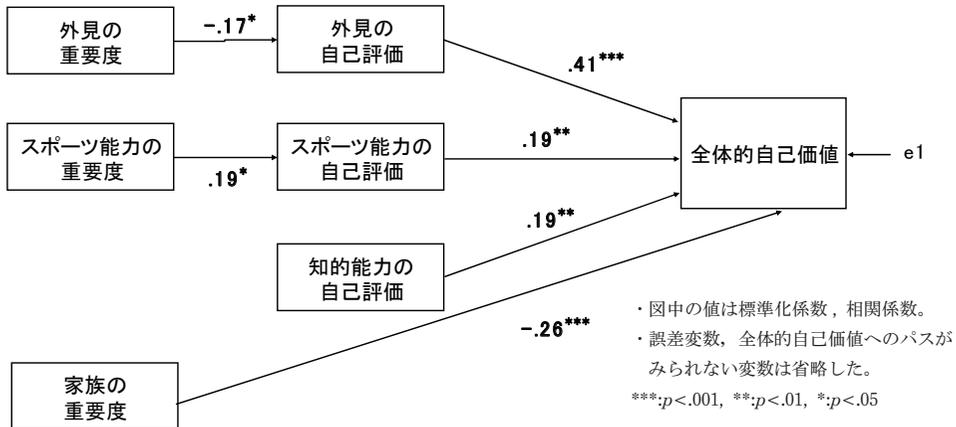


Fig.5 最終的なモデルの推定結果（2年女子）

である。重要度については、男女ともどの学年もすべての側面が自分にとって重要であると評価していた。

全体的自己価値と具体的側面の自己評価、具体的側面の重要度の関連については、「身体的外見の自己評価」は、男女ともいずれの学年においても、全体的自己価値に最も関連しているようである。

1年男子では「スポーツ能力」、1年女子では「知的能力」、2年女子では「家族との関係」の「重要度」が全体的自己価値に否定的に影響していた。それぞれの側面を重要であると感じているほど全体的自己価値が低くなっている。各側面を重視している生徒がその側面での失敗経験やうまくいかない経験などネガティブな経験をすることにより、重視していない側面でネガティブな経験をするよりも、全体的自己価値が低下してしまう可能性が考えられる。

男女差をみてみると、男子は「知的能力」が自己評価も重要度もいずれも全体的自己価値には影響していない。勉強ができるかどうかは自己にあまり影響を及ぼしていないようである。女子は、「知的能力の自己評価」が全体的自己価値に影響しており、勉強ができるかどうか肯定的自己評価に影響している。男子は「家族との関係」を重要視しているかどうか自己評価に影響し、全体的自己価値に影響している。男子にとっては家族との関係を重視していることが肯定的な自己評価につながるようである。

学年での違いをみてみると、男女ともに1年生の時は全体的自己価値に影響していた「友だちとの関係」が2年生では影響しなくなる。友だちとの関係が次第に自己への肯定感には影響しなくなるようである。2

年生では「スポーツ能力」を重要視しているかどうか自己評価に影響し、全体的自己価値に影響している。スポーツ能力が重視していることが自己の肯定感を支える1つの要素となっているようである。

【引用文献】

- 1) Harter, S. Identity and self development. In S. Feldman and G. Elliott (Eds.). At the threshold: the developing adolescent. Cambridge: Harvard University Press. Pp.352-387 (1990).
- 2) O' Malley, P.M. & Bachman, J.G. Self-esteem: Change and stability between ages 13 to 23, Developmental Psychology, **19**, 257-268 (1983).
- 3) Rosenberg, M. self-concept from middle childhood through adolescence. In J. Suls, & A.G. Greenwald (Eds.), Psychological perspectives on the self, vol.3. (pp.107-136) Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates (1986).
- 4) Yamamoto Chika, Ujiie Tatsuo, Ninomiya Katsumi, Igarashi Atsushi, & Inoue Hiromitsu. Longitudinal development of global self-worth and self-evaluations during early adolescence in Japan, The Society for Research on Adolescence Biennial Meeting (2006).
- 5) Harter, S. The Self-Perception Profile for Adolescents. Unpublished manual, University of Denver, Denver, CO (1988).
- 6) Harter, S. The construction of the self, New York, NY : Guilford press (1999).

- 7) DuBois,D.L., Felner,R.D., Brand,S., Phillips,R.S.C., & Lease,A.M. Early adolescent self-esteem: A developmental-ecological framework and assessment strategy. Journal of Research on Adolescence, **6**, 543-579 (1996).
- 8) 山本ちか・氏家達夫・二宮克美・五十嵐敦・井上裕光 中学生の社会的行動についての研究 (49) —具体的側面の自己評価および具体的側面の重要度が全体的自己価値に与える影響— 日本心理学会第71回大会発表論文集, 1101 (2007).
- 9) Rosenberg,M. Society and the adolescent self-image. Princeton, NJ; Princeton University Press (1965).
- 10) 山本真理子・松井豊・山成由紀子 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-69 (1982).

#### 【付記】

本研究の結果の一部は、日本パーソナリティ心理学会第16回大会 (2007) において発表した。

本調査の実施にあたり、調査にご協力いただきました高校の先生方、並びに調査にご回答いただいた高校生の皆さんに心より感謝いたします。